

しだ

10周年記念号



17.

新ルイキソツガラス 横浜支部

1966. 12. 13. 刊



巻頭言

10年一昔と云くから言われてはいますが、私達の横浜支部も早や10年になりました。

10年前、木枯の吹く寒い夜、横浜の南、弘明寺の一隅で念合を誓いだのも昔のことになってしまいました。

新ハイキング自身16年の歴史を持つ中に、10年を迎えた支部は数少なく、数年前には20余を数えた支部の中にも、途中で消えていた処があります。

私達の支部も決して楽な歩みではなく、幾多の苦難にぶつかりながら、歩みを果敢として今日に至り、設立当時の会員もろくに若くなり、若い世代へと会員も移り変わって来ます。

10年で一区切りをつけ、これからは若い力で推進し、新ハイキングクラスの中に、横浜



目次



巻頭言 (1)

横浜支部10年の思い出 (2)

支部と共に10年 (3)

丹天シリーズの思い出 (4)

支部に入ってから一年 (5)

支部山行報告 (119回、121回) (6)

支部山行、10年の足跡 (7)

鈴木国之、久保田治

熊谷幹夫、石山 武

石井春男、奥野 昌

影山元芳

支部しありとなるよう、リードしてやきたい
と思ひます。

そして永遠に続く山仲間を念として、世にぐ
さしい幸福感をもたらしめてくれる山旅を続け
て行こうではありませんか。

私達は新ハイキングクラス横浜支部がある中
からこそ仲間になれたと言うことを忘れぬよ
う、今後も支部発展のために協力していただ
きたいと思ひます。

過去何回もこの欄でのべたように、私達は
山旅そのものが生活ではありません。勤務の
余暇を利用して自然に親しむことを願って毎
月一回の山行を行なっているのです。それが皆
のためにも支部のチームワークをもっと良くし
なければならぬと思ひます。皆さんの一層
の協力を願ひします。

二十一年一月一日

横浜ハイキング会
横浜支部
十二月

思ひ出の丹次 ———— 中山一重 (33)

山へのあこがれ ———— 熊谷幹夫 (34)

山恋い ———— 鈴木国之 (35)

私の初山行 ———— 石原康昭 (36)

初めての浅間山 ———— 石山 武 (37)

初めての山 ———— 久保田治 (38)

鳳凰三山 ———— 中山一重 (41)

竜仙山 ———— 浅井俊明 (42)

丹次・松洞丸 ———— 小川竜利 (43)

北岳から塩見岳へ ———— 浅井俊明 (44)

鳥頭 ———— 中山一重 (48)

仲間の横顔 ———— (50)

会報後贈仰礼 ———— (55)

あとがき ———— (56)

頭字、浜野条治、長紙カッ卜、影山元若、
文中カッ卜、影山元若

十一年の思い出
来禮冬会

新ハイキンス

横浜支部

十年の思い出

浜野冬治

十年一昔と言いますが、新ハイキンス横浜支部が創立してはや十年になります。私はこの十年前のことを今思い出してこの文を書いています。

十年前の十月初めの夜、平本ヒラモトと言う青年が私の家を訪ねて来ました。名も知らない若い人でしたが部屋に通しお話を聞きました。

彼は数ヶ月前から「新ハイキンス」を読んでいるが、支部を作りたいと思ひ本部の森田モリタさんに手紙を出した処、浜野ハマノと言う人に相談したらよいだろうとの返事だったので来た、と言うことでした。

その日は雑談をして、二、三日中に彼の家へ伺って計画をいたしました。ようと言って列ねました。

十日ほどたってから彼の家を訪ねた時、そこに中山博ナカヤマヒロシ氏へ中郵便局勤務でしたが36年に他界しました。私が来て居り紹介されました。そこで三人で打合せを行ない、まず横浜にいる読者の住所録を本部からとりよせて検討し、約四十名ほどの会員に通知を出すことにしました。それは寒い夜のことでした。

十一月初めの夜、弘明寺のやきとりやで夕食をすませた後、平本氏の家に行き中山氏と三人で口取りを兼ね、近くの町内会館に会場を取りました。

いよいよその当日、十二月五日、本部から浜田、松野両氏の出席をお願ひし、スライド映写をして口取り、新ハイキンスクラブ横浜支部の設立準備会を行ないました。出席者は三十名ほどで、はじめの集会としては実に盛会でした。寒い夜でしたが、集った方には大変迷惑をかけましたが、全員の賛同で「横浜支部」が設立されました。

役員もどうかとこのい平本君を支部長にし、翌二日に第一回集会、三月には第一回山行を丹次主幹にして行なわれました。

設立当時に努力してくれた人がいままなを十年一日のごとく支部のために働いている。私の知って居るのは、影山、小川の両君です。会社の多忙な中を支部のためによく働いてくれたことに感謝しています。私は老人で何の役にもたちませんでした。このお

二人の努力に負うところが大きいと思えます。淋しくなつた集会を益会にするためあらゆる力をかしてもらいました。

一時は東神奈川の東健サービステーションの二階をかりて集会を行なつた時は、横浜の東陽でした。金出席者は多数で益会で実に愉快でした。

当時私は、神奈川県山岳連盟の常任委員をいたしましたので、影山、小川西君には力をかりました。この西君と三人で奥岳連の集会に出席したこともあり、支部の新しい人をできるだけ山岳講習会に出るようすすめました。奥東岳連主催の登山大会には二人で参加してくれたこともありました。

私は横浜支部十年の行幸に、ぜひこのお二人を支部として感謝の意味でほめたたいのです。長い年月をよく支部のために力をおします働き、新しい人をも導いてくれました。今、私達はこのような立派な人を持つていたので、これからの横浜支部をフレッシュなプランをたてて進みたいものです。十年の行幸にはぜひこの意味を忘れないで参加しましょう。

筆をとめる前に、支部をここまで育ててくれた影山、小川西君の他に、協力をしてくれた人を私の知つてゐる方だけお知らせしておきましょう。中山さん、斎藤さん、久保田さん、柳天婦、鈴木君です。

これないようになりましょう。



山岳連盟

支部に入ってから一年

相野谷喜世子

新ハイキングクラス横浜支部に入会して丁度一年
それまでにこんな楽しいクラスがあるとは全く知ら
なかつた。それこそのはずし山へなど興味がなかつ
たからである。それが昨年四月少し早かったがワ
ラビ列をかねて陣馬山へ行つたのがきっかけとな
り、五月には飯盛山へと、どうゆうわけだか山歩き
に興味を持つようになった。

初め会社の山岳部に入ろうと母に相談したら反対
さし、会社の人にいろいろ聞いてみると山岳部の
ように強行でなく、歩くことが目的と言うこゆうゆ
所があるんだと、三十七年頃の「新ハイキング」
と言う本を見せてくれた。その人も一年程前
横浜支部に入つていたそうである。その話を聞いてす
ぐ横浜支部に八かきで連絡をとりました。返事が
六月の集会日に届いたのでまにあわず、次の七月の
集会に出席し、いろいろ話を聞き楽しそうなので入
会することになりました。下のヨキ谷喜世子の「山
「山歴はどのくらい？」と聞かれたときは困つて

しまいました。だって満足に山へ登ったことがなかつ
たのです。そう登ったと言えは小学生でも行ける
ような高尾山、房総の鋸山、それと大山ぐらいでし
た。

支部に入って最初に参加した山行は七月二十五日
丹沢の天登りで新芽の沢でしたが、あいにく朝から
小雨、ところが横浜の中心部はふつてなかつたとか
で一緒に行って下さる方に一時雨余りも待たせてし
まいました。ほんとうに申し訳なく、改めて当時御
一緒だった方にお詫びします。

八月の山行、安達不良山は台風のため中止。

そして九月、本部山行の嵐風三山へ中山さんに誘
われて出かけました。はじめは南アルプスと聞いた
ので心配したが、足には自信があったので出かける
ことにしたのです。

都立石鏡泉から入つてその日の宿、嵐風小屋まで
は何とか皆について行かなくてはと登るのに一生懸
命だった。一足ことに高くなり、それにつれ下界の

支部と六六十年

影山元芳

新ハイキンクラブ横浜支部も今年で十年を迎えた。ついこの間のことのようにも思えた。発会当時の記憶も大分忘れてしまったが、思い出しながらもたどってみよう。

昭和32年2月7日(木)雨、風強し、新ハイキンクラブ横浜支部発会集会

於、南区遠町町内会館、参加16名
これは当時の私の日記からである。

私が「新ハイキンクラブ」なる雑誌を知り、そして読者になったとき、かけも今は記憶にない。雑誌ととりはじめて暫く経った或る日一枚のハガキを受取った。

前略、此の度新ハイキンクラブ横浜支部を設けさせていただきます。貴殿の御参加を希望します。……
そこで初めて山仲向のクルーズに加わることになった。其処で沢野条治、加藤喜代子さん等の大先輩を知ったのである。

その記録が雑誌「新ハイキンクラブ」41号(32年1月号)66頁に次の様にのっている。

「横浜支部発会準備会が12月5日(木)、南区遠町会館で行なわれ、沢田、松野陪席、支部発会を求めた後、スライドを上映した。参加21名、支部連絡先平本和夫、南区中島町4の89」

それから後の42号(32年3月号)66頁には、
「SHC横浜支部結成、26名のメンバーで結成しました。……連絡先、平本和夫」
とあり、同号67頁には次の様にのっています。

「新ハイキンクラブは会員の増強を増加とともに、会場が手狭になりました。ご出席の皆様には満足していただけるような、テーマがあつたとしても、親しみある集会としての運営には限度があるように入ります。……」
明らかに新しい新ハイキンクラブの発展には会員の増強に、もっと活動していただけるような組織が必要でありそれには支部を作つて地域的に或は

地域的に有志の会員に働いていただき、集會に、研究会に、ハイキング計画に活動をお願いすることが好ましいかと思われます。ご協力を期待します。現在、宇都宮（31/5）、東葛（31/7）、江戸川（31/8）、中央（31/10）、横浜（32/2）の五支部があります。

当時の私は山歩きも囃出りで、大菩薩峠、雪取山、日光白根山、入笠山、丹沢主稜等であり、同僚の二人が単独でのんびりと歩いていましたが、発起人平本氏の家に近いと云うことで発會集會には世話人をおあせつかったです。何も判らない事だらけでまごつくことも多かったです。諸先輩の抑協力を得て今後の方針を求めた。集會、山行を隔月に開催し、一回山行を3月23・24日、丹沢主稜で行うこととし、後は平本、影山、金子の三名を求めた。山行当日、茨木駅前に集ったのは1名、ついこの間初めて仲間になった人連だが、すぐうちとけてなごやかになる。塔、岳嶽小屋で仮眠の後、蛭ヶ岳、姫次、青根へと白銀の尾根を歩き下った。

そして次回の集會場はもっと交通の便の良い所を、言うことと歩き廻った。現在の婦人會館を次め、會員に連絡し、24名の出席を得て集會は毎月、山行は隔月と改め、役員5名を選出した。

若輩な私もその一人に選ばれ、支部の発展に力を投じたが、支部発足5ヶ月目に発起人の平本氏が都合で退部された。はからずも私が代行するようになり、負担を感じたが、そこは若きファイトを燃し、支部発展のための努力をしてもりである。

9月より山行を毎月行なうことにし、支部報第一号を、12月には歌集一号を夫々発行した。會員の方々の協力もよく、集會には毎月15名以上の出席があり、盛會で楽しく過して来た。

そして一年目の忘年山行の時、マビツ山荘前で酸っぱい写真の「新ハイキング」48号（33/3月号）のせせらぎ横に紹介した。

この間に他にも支部が増え、49号（33/5）によると19支部を数えるようになった。

私の山行も支部に入ってから急速に回数が増え、毎月一回以上、他人の心配をよそにせせと支部山

行、伯人山行にと出かけて行った。

支部二年目の33年8月には初めてのキヤンプを丹
次で行ない、支部報もオラ多より「E」と改め、34
年11月より連絡紙「ニュース」を発行し、今後毎月集
会日に発行することにした。また35年2月には支部
山行に初めてスキーを行なった。同山行は3月2日
その他に、小川寛利君の努力により、主山行の他に
沢登り技術習得を主にした丹次シリ、不を、35年
4月より3年向へ23回も続けていた。さう支部の
ため大いに貢献してくれたい。

以来、幾多の苦難はあったが、それらを切り抜け
て今日の横浜支部となり、ここに十周年と言うのが
やさしい一ページを極めたのである。

五人に余る山行も、また係だけの楽しい山行もあ
り、四人とか集まらない集会もあった。
会場も最初の通町会館から婦人会館、東電サービス
ステーション、私学会館等々ジフシ一の如く転々と
したが数年前からは今の婦人会館に落ち着いて集会を
行なえるようになった。

十年一昔、と言われぬが、あの発会日に集まった

仲間も、今では五指にも満たない類振れとなつてし
まった。この向支部の代表も、平本、影山、中山、
八田、小川、影山と変ると共に仲間の類振れも八中
に入籍り、今年若さにあふれた人達でにぎわうよ
うになつたことは長しい次才です。

支部と共に十年、幾多の思い出がある私ですが、
ここにその記念として「評報」して、17号を発行
出来ることは善しいことであり、協力して下さい。
皆様には敬意を表します。

そして私も山を歩いて来た。今後も生涯の山旅とし
て出来る限り、歩き続けて行きたい。

来年の夏には新ハイキングクラブの合同キヤンプ
を行なうことが決り、横浜支部がその世話をするこ
とになりました。私達でも出来るんだと言うことを
示すキヤンプだと思えます。そしてこれから新ハ
イキングクラブの先峰として増々発展を期待してい
と思えます。皆様のよき御協力をお願いしたく思
います。

終りに十年向の主な出来事をお知らせしておきま
す。

よう、このとき、

10年間の主な出来事

- 31. 12. 5 横浜支部設立準備会
- 32. 2. 7 横浜支部発会集会
- 3. 23, 24 才一回山行、丹次主幹
- 4. 4 才一回集会
- 9. 5 支部報一号発行
- 12. 5 歌集一号発行
- 33. 3. 30 才一回本部集會、翠鳥山
- 8. 16, 17 丹次水無川キャンパス
- 24. 11. 10 支部報5号発行、"じぶ"と改名
- 11. 15 連絡紙ニユース一号を發行
- 35. 2. 21, 22 支部初スキ―山行、霧ヶ峯
- 4. 16 山崎凡夫・小塚嘉子両氏御結婚
- 4. 17 丹次シリーズ始まる、才一回表次郎次
- 36. 7. 26 元支部代表、中山博氏死去
- 10. 15 才一回山行、支部五周年記念山行、丹次、三ノ塔に集中登山
- 37. 9. 12 支部山行のアルバム作成
- 11. 14 歌集二号発行
- 12. 12 横浜支部用ワッペン作成
- 38. 4. 9 支部用夏天幕購入
- 4. 21 天幕設置訓練を丹次で行なう
- 10. 8 "じぶ" 13号発行、丹次特集号
- 39. 5. 8 久保田治、酒井国栄両氏御結婚
- 7. 29 北アルプス
- 8. 4 剣岳に夏山合宿を行なう
- 41. 3. 6 本部山行の担当、南郷・暮山
- 3. 17 山水会の担当、最近の丹次についで
- 8. 28 本部山行の担当、丹次クスハ沢
- 11. 8 歌集三号の発行
- 12. 3, 4 十周年記念山行
- 12. 13 "じぶ" 17号、十周年記念号の発行

新ハイキングレ118号(40年8月号)に支部名でユース紹介記事を発表。119号(40年7月号)には剣岳合宿記録を発表した。

丹沢シリーズの思い出

小川竜利

支部創立以来、近くに丹沢山塊という立派な山がありながら、いつでも行かれると思っっているためか、いがいと山行計画にくまれているので、支部山行のほかに月一度水ぬるむ季節に表側の沢登りを主体として、丹沢シリーズと銘うって、斎藤氏と二人で係りを引き上げた。

沢登りは尾根を歩くのと違い、棚へ丹沢では滝のこともさうよんんでいるしを登ったりか、場を登ったりするので技術的なことも要望される。また、棚は水流で濡れているので履物はワラジが最適である。

沢沢の駅前でワラジを買い、沢の合ではきかえるのだが、ちゃんと履かないと、最後までもたない。このワラジの履き方を教えるのも一つの楽しみだった。

棚を登るのは岩登りと同じで落ちれば怪我をする危険がある。他のパーティが我々の目の前で落ちるへ落ちたのを見ることがあった。

かし場では落石に注意しなければならぬが、自

介で落ちるばかりでなく、前の人か落した石が飛んでくることもあるので頭の上の方の注意が大切である。幸いなことにシリーズの怪我はなかったが、前のパーティの落した石にあどかさしたこともあった。せつかく出かけたながら林道で雨に降られ、橋の下にもぐりこんで雨宿りをして、とうとうあきらめて戻ったこともあったり、係りだけの二人きりで歩いたことも何回があった。

ただ三年向無事故でこのシリーズを終えたことが一番の成果だったと思う。

私が係りをやっていた頃と今では会員もほとんど変わっているので、また新しくシリーズとして誰方がやって下さることを願っています。

題名の「思い出」とは遠い文になってしまいました。だが、同じ沢を何度も登っているのいろいろな混同して思い出も影がうすれてしまい、とりとめもないことを書きましたが、お許しの程を。

支部山行報告

昭和41年3月より
(才119回)

昭和41年12月まで
(才131回)

才二九回	3月6日	南郷山、幕山	影山元芳	(14)
才二〇回	4月3日	物見山	鈴木國之	(15)
才二二回	5月2日	愛鷹山	影山元芳	(16)
才二二回	5月5日	檜形山	久保田治	(18)
才二三回	6月19日	大峯山、吾妻耶山	鈴木國之	(20)
才二四回	7月3日	菅場山	鈴木國之	(21)
才二五回	8月5、10日	飯豊山 (係都合で中止)		
才二六回	8月28日	丹次アスバ次	熊塚幹夫	(22)
才二七回	9月18日	浅間山 (雨天中止)		
才二八回	9月23、25日	西穂高岳 (係都合で中止)		
才二九回	10月23日	浅間山 (大真名子山区変更)	石山武	(23)
才三〇回	11月20日	栢石岳	石井春男	(24)
才三一回	12月3、4日	一〇周年記念山行、丹次塔ノ岳集中	影山元芳 南野昌	(25) (26)

幕山・南郷山

影山元芳

東海道線湯ヶ原駅下車。バスで終実の鍛冶屋部落まで行く。下車後自己紹介をかんたんにする。出立。がトドをくぐり新崎川を渡り五部神社の前に出る。神社に一拜する人、水を補給する人それ以外である。ここから城山山荘への道を左に見て右の道を行く。部落をはみぬると道はゆるい登りとなり野水池の前に出る。6才の子供を先頭にのんびりと歩すが、若い子供達はやはり元気がよく我々をばなしてゆく。将来は皆有望な若者たちである。

以外に時間のたつのは早く、幕山につかぬ前に昼となつたため、大鹿平で昼食と記念撮影とした。一時間程休んだ後山頂に向う。急な坂路となり喘ぎがフスいて山頂に達する。のんびりとした草で昼寝にはもつてこいのだが、少し肌寒くどんよりとした天気。真鶴半島をかすんでみえる。長尾は無甲と山頂から防火線に伝ってしばらく下ると、自鑑水(自鑑水とも言う)に出る。ここから道を右にとり、南郷山右手の鞍部めがけて、ヤマと茅

の山腹を直登し、屋敷上にて右に行く。この登りはハッキリせずヤマコギに皆苦しかつたようである。南郷山はどこと言つてとりえのない尾根である。の山で、すぐ下にはゴルフ場がひらけている。

山腰より明滅する一縷の踏跡を求めてヤマをこえながら、ゴルフ場の裏をめぐり下る。この途中、せせらぎが足にけかえり、背負つて下る。

下りはじめは頃より雨となつたので皆の足は早く乾く。子供達は途中で車をひろつて真鶴駅へ入る。残り三人は車に泥をはねられながらも歩いていく。残りの三人は車に泥をはねられながらも歩いていく。くしかない。ヤマとこのことで口道に出たらバスが来るので乗つて駅へ。

- ハコース、タイム
- 湯ヶ原(10:10) || 鍛冶屋(10:16) || 10:20 || 五部神社
 - (10:30) || 10:35 || 野水池(11:05) || 11:10 || 渡橋
 - (11:25) || 大鹿平(12:10) || 13:00 || 幕山(13:15)
 - 13:30 || 自鑑水(13:45) || 南郷山(14:30) || 14:45 ||
 - 林道終実ゴルフ場ウラ(15:25) || 吉永バス停(16:25)
 - || 真鶴駅(16:40)
- 八参四者、金不口之、影山元芳、赤野宗治、石山武久、久保田治、中里一久、町田麻子、
- 本誌名

本部集中

奥武蔵 物見山 鈴木国之

横浜を反らぬ頃、空一面雪があつて肌寒い。天気は八高線に乗って高麗に着くとすっかりはあがつて絶好の行楽日和となつた。梅峠にいらして、町の中心を通り橋を渡つて日和田山に取り付く。のんびりと暖かい春の陽を浴びて歩いた。畑には穂の花が咲き、紫色のスミシの花がかわいらしい。物見山を至て鑑北湖にぬけるハイキングコースは特に人が入つていて、行列が山頂まで続くと、言つても大げさでないほど混雑し、さながら「パート」の階段を止へ止へと登る感じにはいささか驚いた。おちついて休む間もなく日和田山につく。物見山へはいって、たんに部落へ下りてから登り直す。一等三角点のある頂は猿まじ。遠く霞んだ奥武蔵の山々だけが静かに連なつて見えていた。

昼食後、乗中の各支部の報告が始まつた。井の頭、埼玉、相模原、4代田、台東、江戸川、中央、港、品川、目黒、太田、城北、川崎、世田谷、足立、...

参加人数は七五名、今年で8回目となつた本部集中も年々盛大になる。下山コースは各支部自由とすることで我々は鑑北湖へ下つて、桜の咲く鑑北湖は見物入とハイカーのバスターは行列が途々と続いていく。来年の4月のオーストラリアのオーストラリアの場所になるかわかりませんが、年々大勢で行きたいのです。

- ハコース、タイム
- 東神奈川 (7.21) 八王子 (8.34) 8.49
- 東武 (9.27) 9.41 高麗 (9.50) 10.15
- 日和田山 (11.05) 11.10 物見山 (12.00) 14.20
- 鑑北湖 (14.55) 15.35 三毛 (15.40) 16.24
- 八王子 (17.05) 17.20
- 東神奈川 (18.25)

参加者：久保田、久保田、中里一久、高山、美恵子、浅井俊明、石山武、相野谷喜世子



金時山と愛鷹山

影山元芳

愛鷹山縦走は一日半の行程で十分なのだが、横浜を午後登りではもったいないと言うことで朝登りで途中金時山に寄ってゆくことにした。特別参加の4名とは列車の中で落ち合った。

小田原で連絡よくバスの便があり、仙石まで行く。車掌の「金時山へ行く方はここでおりて下さい」と言う声に我々は少々ていさかつた。

金時山登山口の導標に導かれ、矢倉沢峠への急な道を行く。一足毎に仙石高原が眼下に俯がり箱庭のような眺めである。20分ほどで峠の茶屋につく。この小屋はか×ツクトイレ一回10円也とか。山頂から山頂めがけての急な登り、一汗かく頃には山頂につく。明神、明屋へのぼりかゝる稜線が美しい。右手には丹沢の山がぼんやりとみえる程度で残念だ。左手の丸岳の向うには明日登る愛鷹山の相似峯もぼんやりとみえる程で明日の天気が心配だ。二二三の山頂には、坂田の公時を祀った小祠があり、その側に金時山荘がある。記念にと名草にそい

そいサインをした後、茶店の金時娘いや金時おぼさんに敬意を表して乙女峠に向う。

茅戸の長尾山をすぎ、正面の丸坊主の丸岳を眺めながら峠を下る。学生が大勢にまろしてにぎわっている。この峠からの富士は絶品なのだが、何せ曇天のため眺望なくその広大な裾野が少し見えるだけ。小屋の裏でコーラスを楽しみ、折殿場を下った。

折殿場駅よりバスで愛鷹山麓の候山へ向う。俣山村の清水館に着いたら中山道から電報がきていた。2時頃車でくるとか。総員に名うちせ性7名のにぎわい。

4時30分迄床、はつきりしない天気だが午前中はもったろうと出発する。十道不街道を愛鷹山登山口まで行く。途中登山者に乗せたTAXIが我々を夜いて行つた。登山口の指導標に従い左へ林道を大沢沿いに行く。20分程行くと、右から湯沢が入り愛鷹山荘入口との導標がある。カラカラした足場の悪い荒れた湯沢を行く。堤堤を越した少し上で石の尾根に取付く。ヤブをこぎながら30分程登った所で腹を巻くように行くと、山荘の前に出る、すぐそばに

木場があり、咽をうるおし一息入れる。山荘は荒れ
てはいるがシユラフ持参ならば泊ることは出来る。

山荘の裏より登り稜線に出るがガスがかかり遠望
はきかず、正に黙々と歩くのみ。

大展望台と言われる富士見平に立っても何も見えな
く時折切りぬるカスの向よりは、いま歩いてきた稜線
と黒岳がかいまみえるだけである。ヤセ細った尾根
を急登すると、五〇五峰の越前岳につく。樹林の中の
ためだがカスも濃く、この山塊最高峰はあまりパツと
しない。山頂で記念撮影をする。

山頂からは大きく下る。足元に注意しながらヤセ
尾根を行く。全く眺望もなく、カスが上下するなか
を行く。霧の稜線散歩と言う所か。しかし武前・呼
子岳の中程で心配していた雨となったが正に雨
ではないので、様子を見ながら先を急ぐ。

呼子岳で小休の休ヤセ尾根を割石峠に出る。峠から
須山大沢を下る道が左に、右には割石沢が入ってい
るが大分悪そうな沢である。雨も小雨でいいしこ
とも悪さそうなので、錫岳を越すことに決めた。
一三〇〇峰のピークを乗越すといよいよこのルート最
終所である鋸の歯にさしかかる。先着の二人のパー

テイが巻道がわからず偵察中とのこと。

巻道は一峰と二峰との間の20分程度のルンゼを下るよ
うになっている。針金を正よりスリルを味わいな
がら下ると、二峰を巻くように登り返す。次にガラ
カラしたイヤネニルンゼを下る。浮石が多く針金
をたよりに慎重に下る。見上げると二・三峰間は大き
く切れてこのルートの直登高は容易でないことを現
わしている。ここから少し下りぎみに三峰をまくと
キレットのコルに向ってオニルンゼを直登するよう
になる。何れも針金がついているので多少は安心さ
せられる。この少し手前に今ムニ一杖の割目があり
この方が楽に登れる。取竹が少し悪いが5分程度でた
いしたことはない。ここを登りきると四峰の東側を
鏡をたよりにまくように登り、五峰も針金をたより
に東側をまくと悪場も終り稜線に立つ。ここで大休
止とし、昼食をとる。さすが悪場通過に一時間半以
上の緊張の連続に皆疲労がみられるが元氣である。
さすが疲労は隠せず足どりは重い。位牌岳の手前
で雨は大降りとなって来た、とにかく山頂まで稜線
らねば逃げ道がないので皆黙々と歩く。
位牌岳での休息もそこそこに須山に下ることにして、

縦走は又の機会にと夜線を後にする。この下りは割と歩きよく、よく踏まれた道である。尾根道をぐんぐん下り一時間半程で材不集積場のある所に出た。

ここからは市尾の道と今区さし、濡れ尾の尾区ひき下りながら下知田峠落に出た。ここから三倉駅行のバスに乗り、尾をシートに授け、帰途についた。ハコース・タイムV

小田原(9:20) 川金野山入口(10:10) 矢倉沢峠(10:35) 11:45 金野山(11:30) 12:25 乙女峠(13:20) 14:15 乙女口(14:35) 14:45 川部取場(15:00) 16:00 11須山(16:30) 治(17:45) 登山口(18:10) 山荘入口(18:30) 1 愛蔵山荘(17:20) 17:30 1 富士見平(8:45) 9:05 1 越前岳(9:25) 9:30 1 呼子岳(10:15) 10:20 1 割石峠(10:35) 10:40 1 鋸岳取付(11:00) 1 鋸岳終り(12:45) 13:15 1 越前岳(14:20) 14:30 1 材不集積場(16:45) 17:20 下知田(17:20) 17:45 1 三倉駅(18:30)

八参加者V

影山元芳、笠谷幹夫、石山武、相野谷喜世子、石田康昭、石井春男、町田康子、中山一宣、堀川喜久子、末松彰子、田村紀代子、樋口江美子

櫛形山

久保田 治

芦原鉾泉前の河原より、ここからの登山路を眺めると尾根がのしかかるようにおおいかがさし、先が思いやられる。稲草礫に従い岩窟館の手前横から尾根に取付く。種々尾根はさくさく登り、下から見たよりは柔だ。無風で全く暑い。一面低くはれこめる雲の中でこれから登る方向は音空がまはつた。加えて見えかくれする夜叉神峠方面に虹が美しくかかる。一時間ばかりで平らな所に登ると今度はやわらかな尾道の直登だ。変化の多い樹林のたぬと夜行での寝不足がたたりやたらと眠い。

突然あたりが明るくなると雲霧着小屋前に停たす。小屋のすぐ上に清水が湧いている。冷たくてうまい。予期してなかっただけにそれは砂漠のオアシスのようなものだ。暑さのため残り少ない水を飲むことにする。あはり一面鹿松が芽吹いて青々と美しい。一登りするとやっと少し下りになる。そこは湿地帯でバイケイ草の群生だ。ここからまた尾根の中の登り、ジク

大峰・吾妻耶山 鈴木国之

先登隊20時に上野駅着。上越線最終列車「新潟行」の行列のトツスにならび座席を確保。上野駅構内は尾根へ行く。若い女性「がめだつ」。

上牧を下りると大峯方面のハイカシが思つたより大勢いたのにちどろく。小和知部落へ歩きはじめると例によつて例のものが降ってきた。さつそく今の恩恵にあずかる。一本松、二本松をすく意松林にほると、もう大峰道。雨は上ったがカスが深くせつかくの浮島をほんぞりかすむ。ジコンサイヤミツカシワ、ヒツジ草などの水草達も、あの美しい花はまだのようだ。しかしツツジの赤や近所に咲いていたアヤメ、シヨウブの紫と黄色だけは周囲の暗い風景とは対比的にあざやかだった。

大峯山へは尾根通しのコースを取り、ツツジの咲く登り下りをくりかえしながらNHKの鉄塔があるヒトクをすくると山頂へ着いた。一〇〇は程下つて登りかえすと吾妻耶山へ着く。大休止とはかり昼寝を

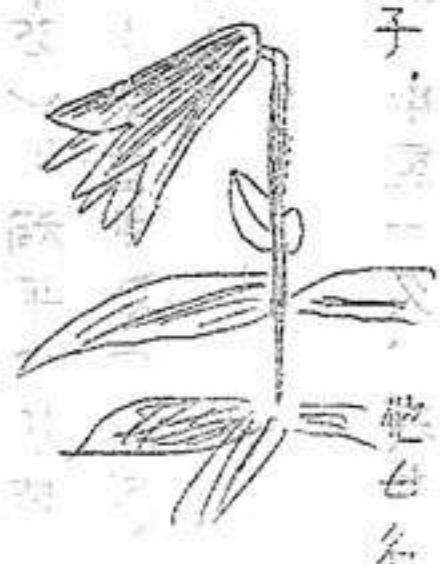
したり、何回目かの食事をとる。期待していた仏岩への尾根道のシマク丁には残がいがかさうさだけでいささかカックリ。

霧の中にそびえる仏岩はまさに威圧的で風雨のオペリスクや金峰の五丈岩を想わせる。途中には鏡がついていて安心が下りに苦痛している女性といふ。二時間余りで湯の町、水上に着き登山の急行で帰来した。

ハエース・タイムV
 上野駅(23.58) - 上牧駅(4.22) - 4.40 - 二本松(6.30) - 6.35 - 大峯道(7.10) - 8.00 - 大峯山(9.10) - 9.40 - 吾妻耶山(10.45) - 11.45 - 仏岩(13.00) - 13.20 - 水上駅(15.25) - 16.50 - 上野駅(19.35)

へ参加者V
 鈴木国之、久保田治、久保田國栄、奥野昌、浅井俊明、石山武、高山美穂子、石井春男、相野谷喜世子、佐次幸郎、池田吾郎、池田美美子

大峯山へは尾根通しのコースを取り、ツツジの咲く登り下りをくりかえしながらNHKの鉄塔があるヒトクをすくると山頂へ着いた。一〇〇は程下つて登りかえすと吾妻耶山へ着く。大休止とはかり昼寝を



丹沢・クズハ沢

熊谷幹夫

大秦野駅前で参加者を確認し、菩提行のバスに乗り、支部参加者名、本部参加10名、合計18名のパーティー。

クズハ山荘の河原で自己紹介し、沢登りの準備をととのえて溯行に入る。

本部からは女性が多く、そのため支部の男性が23人の単位で面倒をみた。最初は老らしいものも見えず平凡な沢だが、横向の滝区すがる頃から老のそぼろを登るようになり、やっと溯行気分が味わえる。

人が多く思うように進まなかったが、それでも先頭クルーフと後のクルーフとの向はあまり相かないですんだ。富士形ノ滝の少し先で昼食とした。

かしの落石をさけて左の草付にとりつく。途中で三ノ落屋根の道に出ると、もう急な登りはなくなり、だらだらと頂上へ。

三ノ落から塔ノ岳への展望はガスがかかっていたが、えなかつたが、大山は雲海の上に出ていて高く感じました。山頂で輪を作り、歌を唄ったり、ゲームを楽し

んでからヤビツ峠へと下った。

へ参加者一口感想

。沢歩きは初めてだったので少し心配。でも今日ぐら
いの所だったからまた行ってみたい。(A子)

。夏の沢歩きは暑くてあつくてしようがない。(S生)
。無事に登れてほっとしました。(B子)

。水無とまた変わったおもしろみがあった。水をかぶっ
て登ったら気持がいいだろう。(I天)

。のんびり歩いてよかった。(I生)
。良かった。ほんとうに良かった。(S男)

。一、二、三トピンはおもしろかった。(C子)
。ハコース・タイム

横沢(6.38)→大秦野(7.55)→8.12→菩提入口(8.30)→8.35→クズハ山荘(9.20)→9.45→富士形

の滝(12.05)→12.45→三ノ落(13.50)→15.30→富士
見橋(16.20)→16.40→ヤビツ峠(17.00)→17.50→大

秦野取(18.30)
入参加者

熊谷幹夫、奥野昌、吉田信子、鈴木口之、石山武、
石田康昭、佐次知子、藤辺南代
他10名

浅向山 石山武

久し振りの好天に恵まれ絶好のハイキング日和である。山荘を後に橋を渡ると山道に入る。紅葉にはまだ少し早いけれど朝日に輝く山がとても美しい。林をすざてすざて二の鳥居に出て、こいより落葉松林の中を登る。

登るにしたがって遠く八ヶ岳、蓼科山が見えとてもよい展望。こいより右に牙山、左に釣鐘岩をすざてしばらく行き、奥居をくぐると火山麓に着く。ここからすこしで箱庭のように広がる昔の火口原、湯の平高原にたつ。

上を見上げると黒斑が朝日に輝き雄大な眺めで、しばらく展望を楽しみ浅向山の登りにかかる。登るにしたがって雪の向から新雪を舞った世アルプス連山が顔を出しすばらしい眺めである。

浅向の山頂につくと寒さと噴煙になやませられてすぐ下山。前掛山の分岐にて昼食、西合戦として楽しみ前掛山に向う。

前掛山から急な斜面を下り、原生林を抜けると天

狗の露地に出る。附近にある原生林は切り倒されて昔の面影はなく、左に浅向を眺めながら石山まで一直線の下りにかかる。

石山で最後の展望を楽しみ時向かないので急いで山を下り、追分に向う。途中車に乗せてもらいどうにか時向をきりぎりしに追分駅についた。急いで電車に乗り込み皆ほっとする。

ハコース・タイム

- 上野駅 (22.59) ~ 小諸駅 (3.46) ~ 6.20 ~ 浅向山荘 (6.55) ~ 7.10 ~ 火山館 (9.10) ~ 湯の平 (9.15) ~ 9.45 ~ 浅向山 (11.20) ~ 11.30 ~ 前掛山分岐 (11.35) ~ 12.20 ~ 天狗の露地 (14.20) ~ 石山山 (15.10) ~ 15.30 ~ 追分駅 (17.08) ~ 軽井沢駅 (17.18) ~ 17.53 ~ 上野駅 (20.24)

参加者

- 石山武、中山一重、熊谷幹夫、鈴木国之、石井春男、石田康昭、相野谷喜世子、加藤康子、他三名



赤石岳

石井春男

早朝五時、まだ暗い空には星が一本、久し振りで
野の心配のほい山行がさきそうである。

東海道線由比駅から少し戻り、左へみかん畑の中
の道を行く。登るにつれて傾斜は急峻を認えるが、

それだけに展望もひろげてくる。野もさう開けた
みかん畑をすぎると富士見平の展望台につく。富士

後鷹山のながめがよい。この展望台の北口から
熊笹の木径をあえきながら登ると、一本松の景勝地

に達する。ここは気持のよい草原で目の前に駿河湾
への向うに遠藤山、天城山など伊豆の山々が連なっ

ている。眺めがよい所である。気持のよい草戸の中
を登って行く。登るにつれて南アルプスの雄山が目

に入る。もうすぐ頂上である。山頂は
山頂はぬれ草戸の原で三六〇度の展望は素晴らしい。

ここで歌を唄ったり、ハイムをやったりでのんびり
一時を過ごした。

帰路は南面に行く。尾根を下る。急な下り尾根が
駿河湾や、清水港を見下ろしての下りは気持がよい。

小島峠から左へ荒れた急な道を三〇分ほど下るとみ
かん小屋にでる。ここよりみかん畑の道を朝下車し
て由比駅に向った。

ハコース・タイム

横浜駅へ5時15分、由比駅へ8時15分、富士見平

へ9時5分、一本松へ10時25分、10時45分、赤石岳へ

11時15分、11時30分、小島峠へ11時30分、みかん小屋へ11時40分

、由比駅へ11時55分、12時10分、横浜駅へ12時45分



丹天

十周年記念・忘年山行

塔ノ丘山集

(1) 影山元芳
(2) 奥野昌

(1) 忘年會

丁A X I で福社山荘につくと先登組は早やアルコ
ール入りでワイワイ。21時30分頃に全員集合。早速
忘年會を始める。

森田俊吉氏、近藤某氏の船入り参加もあり、スキ燒
と何酒入りで歌ったり踊ったり、夜のおけるのも忘
れるほど。宴會が終るとスライド上映。以外とフイ
ルムの持参者が少なくアツと言ふまに終り。寢床は
と晴。

昨年は寝ながら日の出をみたが今日はみられなし。
二年続いて不精はやはりでないものだ。
忘年會中、浜野、春日、近藤の三大家はお茶代りに
に御神でのどをうるおしていた。

(2) 水無川本谷

日時に山荘を出発。大倉尾根班は浅井君一人。山
頂で打込を長い長い棒をかっぎ弁当をぶらさけて行

くの五笑いで送る。

天登り班は一度下まで下り、淺沢キヤンプ場で走
人3人組と別れ、林道を戸沢出合まで歩く。寢不足
で足がもたついていて人が多い。途中大倉尾根で長
い棒を振っていた浅井君に呼びかけたり、もたもた
歩いていこううちになんとみ長い単調な林道を終り、
戸沢に着く。浅沢部沢出合まで行き一休み。
ここで浅沢部班の目名と別れ、本谷班7名は漸行南
始。

河原をしばらく行くと10時のF1が二糸に落ちる
姿を見せる。左側の階段状を軽く登るとすぐ右から
背戸の沢が合流し、本谷は左へすぐらむのF2にか
かる。せ性は身軽にとカツプをとりあゆる。木ール
ドは少いが左側を抜ける。F3は事故の多い所。横
重に登リスリル蕪葉のトラバースをする。沢は小滝
を越したF4、F5、と軽くパス。大分自信がついた
ようだが、F6が寝不足でやりきれない。F6も軽
く過ぎるとS字状にゆるく曲る石岸から二段30分の
淵柵をかけた沖浅沢部沢が合流。あたりは以前より
大分明るくなった。カイルワークを少し見物。
木の又大目沢を右に見て行くとF7、更に小滝を越

えると金おし沢出合。ここで昼食。
「添次郎班は後線にいただらうか」
「棒を持った夜はどこかで昼寝をしているだらうし
などが話線となる。

F1の穴は水が少ないが堂々たるものだ。左の巻
道を登り落口に下る。高度感もあり眺めもよい。こ
れから沢は水量を弱くなりなれしえとなる。洞窟のF
1を越え急なカレ場を落石に注意しながら登ると、
眩々しい表尾根に出る。塔、釜までは新雪で白くな
った道を行く。

は時山頂着。大倉尾根、添次郎班の誰もいない。我
々の方が早かったのだ。富士がかすんで見える。景
色をみるが寒いので山荘に入り一服。待つこと30分
やつこのこと添次郎班が到着。しかし記念の棒が
来ない。「花立あたりで寝ているのでは。棒時まで待
って来なかつたら下ると言っている時に寝過ぎ
ちゃってしとやつと登って来た。

厚生省の人が来ると校かいると言わぬが、せつ
かく待つて来たので、「一〇周年記念、塔、釜、中
新ハイキングクラス横浜支部」と書いた旗を全員交
代で打込む。支部に入って今年でもう10周年になつ

たと言いつ人もいEが、
記念撮影後ドロコの大倉尾根を下った。
抑老休組は堀山あEりまで登り小屋で一棒やつて下
つEとか。飲むと調子よく歩けると言う人達なので
とうとう追いつかなかった。

(3) 添次郎 沢

添次郎沢出合で本谷パーティと別れ、我々も人け
ゴロ口の道を行きF1でリーター木川氏より、沢が
初めてだと言う人に沢の登り方を説明してもらつ。
あつかひがびくくりの人もいEは、こんな細はアサメ
シマエだと言う人もいEてF1、F2と無事パスする
と正面左から大きなカレが押し出していているあEりの
あちこちに、白いものがちらちらする。何かと思ひ
よく見ると雪である。
前方をみるとこの沢最大折れ、即ち大瀬が大手
をかまえている。直登ルートは左手である。木1ル
トが少なかつたが無事パスしEが、大部分の入付左
側の差道を行く。沢はこの上部で二股に岐出し、我
々は右股に行くとする。木の根にぶつかると。この棚
でよく落ちる人がいるらしい。これを越えるにあと

はたいした柵もなく、水の無くなる所で昼食とする。暖い日射をみながら、昨夜遅く寝たので眠気をもよおしてきただけで早々に出発する。この源次郎沢の上部は天登りと言うより、岩登りと言った感じで小気味よく登れる。頭上が大分崩り、抜いた頃凍固で、階段上の道となり疲れた足を高く上げねばならぬ。つらさは全くいやになる。皆それぞれつらい思いをしながら登って行く。大倉尾根に出、花立で一休みの後、岳に向った。山頂には本谷パーティが先についで出て出迎えてくれた。

今日の源次郎沢で自信を回復したが最後のつめどまいった。天は始めておもしろかった。くたびれ味も悪くない。まじったおもしろい。今日は荷物が多かった。本谷の清水の冷たかった。

- △コースタイム△V 大倉尾根
- 大倉 (8.20) | 源次郎沢出合 (9.30) | 沖源次郎沢出合 (10.55) | 金谷出合 (11.25) | 大榎 (12.15) | 大滝 (12.30) | 表尾根 (12.55) | 蔭ノ岳 (13.00) | 花立 (14.10) | 蔭ノ山荘 (16.10)
- △参加者V
- 影山元若、鈴木園之、石山武、石井春男、渡辺朝代、田中絹代、神谷知雄
- △コースタイム△V 源次郎沢
- 源次郎沢出合 (9.45) | 二股介坂 (10.35) | 10.40 | 10.50 | 11.40 | 12.40 | 12.50 | 13.00 | 13.30
- △参加者V
- 大倉尾根、吉田信子、佐次知子、佐次郎、池田吉郎、進地千洋子、今川麟子、石川康子
- △参加者V
- 大倉尾根、中山一重 (花立のみ)

- ・三年前の沢登りより面白味があり、下りのひどかつたこと!! (M・I)
- ・大倉尾根を長い棒かっいでエツチラエツチラのぼり、下りは同じ道をのんびり下った。一年振りの丹沢はなかなかよかつた。(T・A)
- ・木無の林道でアゴを出し、終日アゴが出つはなし。(K・S)
- ・くたびれたお陰で非常にお茶がうまかつた。(Y・Y・S・I)
- ・若い人にはちよっぴりものたりないね。(K・S)
- ・三年振りの沢登り、冷水とスリルで震えがきつた。(T・S)
- ・泣き声いほどに奥にまったく寂れまゝ。(T・S)

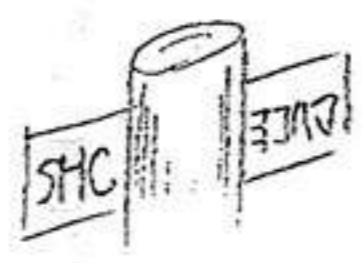
支部山行の足跡

昭和32年2月、支部発足以来この10年間に150回にわたる山行を行なってきました。ここにその足跡として、過去の支部山行へ準山行・丹沢シリーズも含むしを参加人員も合せて発表しましょう。中にはデータ不明で判らないものもありますがいそ

- ・カイルさばきがみられてよかつたが、沢登りの道義はいくらうかがつても、力の移動が思つうように来ないものですね。(K・S)
- ・次は二回目、こわさより面白さを感じるようになつた。山へ登つて心ぞ荒つてきた。これで明日から仕事バリバリできる。(N・Y)
- ・昨日フアイトを燃やしすぎ、今日はぜんぜん不調。(T・O)
- ・登りはスルスル下りはかくかく。(M・K)

10年向

こは空横としておきます。過去にこんな山、あの山にも行ったのかとか、これから行きたい山があるかも知れません。何かの御参考にでもなればと思ひます。



20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
回	回																	回	回
11	11	10	9	8	7	6	5	4	3	3	2	1	12	11	10	9	7	5	3
23	16	12	14	16	20	15	25	13	30	23	16	26	15	3	5	15	28	12	23
本部集中・玄岳	大峯・吾妻耶山	武甲山	乾徳山	丹沢水無キヤン	丹沢ノズ八沢	丹沢必良山	飯盛山	丹沢源次部沢	本部集中・陣馬山	丹沢長尾根	陣馬山	玄岳	丹沢ヤヒツ・善達峠	川乗山	西丹沢丸越路	善達内輪山	大菩薩峠	箱根金崎山	丹沢主成経走
(不参加)	(雨天中止)	(中止)	4 (3/1) 0	9 (5/4) 2	8 (5/3) 2	7 (5/2) 3	9 (7/2) 0	1 (1/0) 2	5 (3/2) 2	3 (2/1) 0	6 (3/3) 0	10 (6/4) 1	7 (5/2) 0	8 (4/4) 1	2 (1/1) 0	9 (7/2) 0	5 (3/2) 0	3 (2/1) 1	11 (11/0) 1

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
回																		回	回
7	6	5	4	3	2	35	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	34	33
30	12	22	24	27	21	24	6	22	18	6	16	5	14	17	19	8	15	18	7
8/1ハ岳キヤン	箆の登山	大菩薩峠	丹沢ミズヒの沢	丹沢主脈	霧ヶ峯スキー	丹沢大山・ヤビツ峠	伊豆大室山	丹沢三峰	谷川岳天見物	丹沢セボの左俣	南ア駒ヶ岳	高尾山(多摩川山行)	大島山	丹沢新茅の沢	丹沢三峰	赤石岳	扇山	大菩薩峠	丹沢湯船山
(中止)	(雨天中止)	3 (1/2) 0	2 (2/0) 0	2 (2/0) 0	7 (4/3) 1	4 (3/1) 6	5 (2/3) 0	2 (1/1) 0	5 (3/2) 0	6 (6/0) 0	3 (2/1) 0	4 (4/0) 0	3 (3/0) 0	5 (4/1) 0	(中止)	(雨天中止)	(中止)	(中止)	3 (1/2) 0

42回	35	8	14	上越国境縦走山	(雨天中止)	計	昇	降
43	9	4	4	帯那山ナイトハイク	6 (2/4)	3		
44	10	9	9	日光台根山	5 (3/2)	0		
45	11	12	13	十文字峠甲武信	5 (2/3)	0		
46	12	4	4	丹沢、高松山	12 (7/5)	2		
47	36	1	22	丹沢、鑑割山	4 (2/2)	0		
48	2	19	19	赤倉スキ	10 (5/5)	1		
49	3	26	26	日の出山	6 (3/3)	0		
50	4	9	9	本部集中登平山	6 (5/1)	0		
51	5	28	29	尾根	10 (4/6)	1		
52	6	11	11	入笠山	7 (3/4)	0		
53	7	15	16	丹沢寄沢キャンプ	(中止)			
54	8	19	21	北丁白馬三山	5 (3/2)	0		
55	9	23	24	美ヶ原	10 (4/6)	0		
56	10	15	15	文部省五周年記念 丹沢三山の塔	10 (6/4)	1		
57	11	19	19	妙義山	(雨天中止)			
58	12	3	3	丹沢、杉の沢	10 (8/2)	0		
59	37	13	15	霧が峰スキ	15 (8/7)	4		
60	2	17	19	菅平スキ	9 (6/3)	1		
61回	3	25	25	本部集中大岳山	会 場 ? 登			

62回	37	4	8	妙義山	1 (0/1)	0		
63回	5	19	20	雲取山	5 (3/2)	1		
64	6	17	17	丹沢駐が丸	(中止)			
65	7	21	23	丹沢寄沢キャンプ	7 (4/3)	1		
66	8	12	13	裏磐梯高原	5 (2/3)	0		
67	9	16	16	陣馬山ナイトハイク	14 (8/6)	3		
68	9	30	10	尾根	5 (2/3)	2		
69	11	5	6	釜ヶ崎山	1 (0/1)	1		
70	12	12	12	丹沢峯坂峠忘年ハイク	9 (8/1)	0		
71	11	6	6	鷹の巣山	7 (3/4)	2		
72	11	13	15	赤倉スキ	6 (4/2)	0		
73	2	10	12	菅平スキ	6 (5/1)	4		
74	3	10	11	越後中里スキ	4 (3/1)	1		
75	4	7	7	本部集中棒の折山	8 (5/3)	1		
76	4	21	21	丹沢天幕設置訓練	10 (8/2)	0		
77	5	12	12	御坂山塊	(中止)			
78	6	2	2	平標山	8 (5/3)	1		
79	7	26	28	丹沢寄沢キャンプ	13 (9/4)	2		
80	8	17	18	白馬岳	13 (6/7)	0		
81	9	8	8	丹沢中山、雨山峠	12 (6/6)	0		
82	10	13	13	日光半月峠	7 (4/3)	1		
83回	11	10	10	御坂山塊	8 (4/4)	0		

104	4	4	No.8 本部集中班ノ岳	2	(2/0)	0
103	3	14	*丹沢モシノ沢(山行)	3	(3/0)	0
102	2	6	8 同志嶺高原スキ一	1	(2/1)	0
101	40	24	*丹沢水無本谷高	5	(4/1)	0
100	12	15	天城山	4	(2/2)	0
99	11	15	荒崎シ一サイドハイク	3	(2/1)	1
98	11	15	北下常念山脈	4	(4/0)	0
97	10	11	清環峽 幸山中	1	(中上)	0
96	9	20	箱根明神是岳(ハイク)	1	(中止)	0
95	8	23	丹沢水無川本谷	1	(中止)	0
94	7	29	3 北ア剣岳	5	(3/2)	0
93	7	19	丹沢モシノ沢	6	(3/3)	0
92	6	21	22 尾瀬	6	(1/5)	2
91	5	31	6 天城峠	3	(3/0)	0
90	5	3	5 南ア風凰三山	7	(5/2)	0
89	4	5	7 本部集中刈寄山	2	(2/0)	0
88	3	15	箱根明神・明星岳	1	(中止)	0
87	2	9	5 伏見菅平スキ一	6	(5/1)	2
86	2	2	雪ヶ岳	8	(7/1)	2
85	39	1	12 3 13 北八ヶ岳	1	(中止)	0
84	38	12	8 橋倉鏡泉と岩殿山	7	(7/0)	0

105	40	5	1 5 4 奥秩父縦走	3	(3/0)	1
106	5	29	30 同志嶺高原池巡リ	1	(雨天中止)	0
107	6	6	入笠山	1	(雨天中止)	0
108	6	28	丹沢表尾根	1	(1/0)	0
109	7	17	5 22 北下薬師堂の平	4	(2/2)	2
110	7	25	*丹沢新草の沢	2	(2/0)	0
111	8	21	5 22 安達太良山	1	(雨天中止)	0
112	9	11	抑岳山ハイトハイク	3	(3/0)	0
113	10	10	日光小田代原	4	(0/4)	2
114	10	24	乾徳山	3	(2/1)	0
115	11	21	石老山	4	(2/2)	4
116	12	5	丹沢源次郎沢	4	(4/0)	1
117	41	1	30 岩戸山	4	(3/1)	0
118	2	19	5 20 越後中里スキ一	6	(4/2)	2
119	3	6	幕山南郷山(本部山行)	3	(6/0)	1
120	4	3	湖本部集中物見山	7	(5/2)	1
121	5	1	5 2 金時山と愛鷹山	8	(5/3)	4
122	5	15	櫛形山	10	(8/2)	5
123	6	19	大峯吾妻耶山	10	(8/2)	8
124	7	4	苗場山	4	(4/0)	0
125	8	5	5 7 飯豊山	1	(中止)	0

華山行

丹沢シリーズ

ハ山行也V 計(男女) 5

126 回 41.8.28 丹沢クズ八沢(本部山行) 6 (5/1) 0

127 9.17 浅間山 1 (雨天中止)

128 9.23 北ア西穂高 1 (中止)

129 10.23 浅間山 8 (5/3) 5

130 11.20 沢石岳 10 (5/5) 1

131 回 12.3.4 10周年記念 19 (12/7) 2

丹沢勢ノ落集中

19 回 36.3.6 表尾根 4 (3/1) 1

10 4.30 クズ八沢

11 5.14 戸沢左俣 5 (4/1) 1

12 6.18 水無川本谷 3 (3/0) 0

13 8.1 同前沢 3 (3/0) 0

14 9.10 水無沢 5 (4/1) 0

15 11.12 三峠遠足 4 (4/0) 1

16 37.4.22 小草平沢・モミソ沢 4 (3/1) 1

17 5.13 勤七の沢 2 (2/0) 0

18 6.10 戸沢右俣 1 (雨天中止)

19 7.1 乙ドの沢右俣 1 (雨天中止)

20 8.26 ミズヒの沢 1 (雨天中止)

21 9.23 金谷沢・源次郎沢 4 (4/0) 0

22 10.28 モミソ沢 3 (3/0) 0

23 11.18 谷川岳沢見物 5 (3/2) 0

24 12.25 水無川本谷 5 (4/1) 0

25 3.14 モミソ沢 3 (3/0) 0

26 6.13 谷川岳沢見物 4 (2/2) 1

27 回 7.25 新等の沢 2 (2/0) 0

28 回 7.25 谷川岳山行兼丹沢シリーズ

1 回 35.4.17 源次郎沢 7 (4/3) 1

2 5.29 新等の沢 5 (2/0) 0

3 6.26 ミズヒの沢 7 (6/1) 0

4 7.17 勤七の沢 3 (3/0) 0

5 8.28 浅間山 3 (3/0) 0

6 9.18 キニウ八沢 1 (雨天中止)

7 10.23 丹沢源次郎沢 3 (3/0) 0

28 回 11.3 三峠遠足 1 (雨天中止)

思い出の丹沢

今から八年も前になるが、大晦日からぶり続いた雨がやんだので弟と二人で、丹沢に行く事にした。軽い身支度で浅沢駅についたのが午前九時。ガスのかかった馬鹿尾根へ大倉尾根を駆けこつよんでいる。こまふつふつ言いながら登る。さすがに今頃登って行く人はいない。下る人とは何人かど行きかうが泥だらけになりながら踏、岳についたのが午後一時。少し時間がかりすぎたのは途中で紅茶を作ったりしたからである。

山頂で雑煮を作り、ちろく食べ一息入れたら三時になつてしまった。登つて来た道を引き返えそうと思つたら弟が鋸割山に行くと言いだし、じみたがな川が無理を承知で歩くことにした。

ガスもやがては小雨となり、誰もいない鋸割山で後沢を下るか、峠に行くかで迷つたが、宇津茂登六時世分の最終バスに向に合つかも知れぬと、峠に向つた。しかし、台風で荒れたままの道は以外と手間ど

中山一重

り、思うようにかせげない。日は暮れ、全身は雨がぬれで歩いていまいと寒くてどうしようもない。水漕の都合でピクニック(野宿)をしようなんて弟は言うが、姉である私は冷静に判断しなければならぬ。ラジウスの石油も少なく、一晩はもちそうもない。あたりはまっくら、浅沢を下るのも大変である。しばらくすると飯場があり、人もいたのでよほど泊めてもらおうかと思つたが、親には今夜帰るかと言つて来た手前、心配はかけられないので歩くことにする。まだ食料もあるし、ランタン、懐中電灯も使えるが一目散に歩き続ける。

やっこの思いでバス停につくと十分前に出たあと、やむをえないのでタクシーを考へフトコロを調べたら千円しかないので、あきらめ中山峠を越えることにする。疲れた体に雨にさられ、足はもう冷たくなり気力のみで歩いている。

弟に泣きごとでも言えは姉としての面子にかかわる。中山峠であり、だけの食料を食べ、歌をうたひなが

ら下る。二俣分岐をすぎ八里に近くなりほっとした
らランタンが消えた。寝たくなつた途中電灯を片
りに装次駅に着いたのは午後九時四十分。解放さ
れた喜びか、帰りの電車の中ではタツタリと歸こんで
しまった。元日早々よく歩いたもので、券もこれに
こりず山によく出かけるが、社の方は皆さんよく
御存じの通りである。

八 その二

新ハイに入つて二年目、やっと山歩きも出ま
うになつた。その時、支部創立五周年記念行幸とし
て四コースからなる三ノ塔集行つことになり、
私はごさんとその一コース、長尾々嶺からを受持つ
ことになつた。

当時はさんは都合悪く、私だけの単独となつた。
横浜駅でH氏の見送りを受けて七時の電車に乗った。
八奈野駅最終バスでみの中へ。さすがに秋の夜も
深まると寒い。水を補給して出発する。せ一人、夜
の山道を歩こうなんてオメテタイのはいない。ライ
トをたよりに気軽に歩く。せ一人のため同情して
か皆話しかけてくる。思いなんて気はない。マイペ

ース。マピツ山荘に泊る。隣に寝ていた人が、ベ
テランに見えたのか明日一緒に歩く事を約束した。
朝モヤの中を林道を下り、丸掛を登って尾根に取り
つく。女性三人ともなればかまじしい。初めて合つ
たとは思えないほど話がはずむ。しかし途中から私
のペースについて行けず、後から行くからと別れる。
紅葉のすばらしいこと、そして静かなこと、オバケ
の沢をのぞいたらリス君と逢う、と言う気軽さ。他
コースからの人と合うのを楽しみに登る。

新大目に出てカツカリ、トランジスタラジオの音
今までの静けさもどこかえやら、行者の鎖場は人でい
っぱい、まわり道をして通り抜け、途中で昼寝をし
たりしてよいよ三ノ塔の登りにかかる。ジクザク
にのんびり歩いて行くとどこかで見た華のある人が
かくれている。何をしているのかと声をかけたらび
っくりしたのがH氏。私の姿を見たのでおどかさう
としてかくれたらしい。どうも私はおどかしにはな
く、図々しい人だ。
三の塔には予定より一時間早くついてしまい、
マピツから来たH氏とかくれん坊をしていただいたの
と
三人で皆のくるのを待つことにした。

ペースが落ちて来て扱いたり扱かれたりで、四時頃
ようやく洞沢ヒュツテについた。

荷物をおろすと肩がふゆゝとして浮きあがるような
変な感じだった。寒くならないうちにと食事をした
が、少食の私は疲れも手伝わてかあまりのどろろ通ら
なく、お茶をのんでお茶をにこした。

セータを着込んで外に出ると、星がすばらしくき
れいだ。どこからかコトラスも聞えてくる。寒くな
ってきたので小屋の中に入ると、皆寝る仕度をして
いて、雨足を交互において、柱によりかかって寝な
ければならなかったが、疲れでいたためかぐっすり
と眠った。

翌日、朝早く起きてライモンをすすって出発。前
日の疲れはほとんどおいていたが、歩き出してまも
なく呼吸が乱れ、あえぎあえぎ登り、上を見れば夕
ムキキをついたり、口の中でズツクサ言いながら歩
いた。奥穂山荘からの印、矢印をたよりに登るが、途中は
汗でびっしりだ。やがて三一九の二桁の奥穂高岳
に到達。いままでの疲れも吹きとびしてしまふよう
に、南アルプス、富士山、槍ヶ岳の山山が一望に見

ゆたさ此感激ひとしち。各自記念写真ととり、ケル
しなるものを積みあげて前穂に向う。尾根の途中で
出会った人に「コロニチワ」と声をかけたが返事が
ないので、ユリヤローと思つて振り返つてみると、
言葉の通じない外人なので苦笑い。

前穂高岳の頂上についた時はすでにかすがかか
つて視界がきかず早々に下り、岳沢ヒュツテに泊る。
夕方から雨が降り始めたので傘をさしながらの食事
だった。

最後の日も朝早く登り上高地に下ったが、登山、
観光客行列をなして並んであり五人位らしい。私
達の整理番が三千番台だったので、大正池付近で
十分遊ぶことができた。

バスにのつてもう帰るだけになると、あそこもよ
かった。ここもよかったと言いつつも、山行が終
つてほんとにたような気分である。

この山行の印象がすばらしかったため以後山に登
るようになり、皆さんの仲間に入れてくれた日次
本なのである。



『山恋い』 鈴木国之

まだ早過ぎるかも知れない。しかし自分の目的の
一つである南アルプスの主なピークに足跡を残した
今、山へかよい、山にひかれ、山に恋いこがれた一
時期がもうすぎ去ってしまったと思える。

あの時は真剣だった。初めての金峰が初めての三
4日の槍ヶ岳。丹沢さへもとうてい行く車の出来な
い高い存在だった。槍ヶ岳には槍沢をこう登ってこ
こに泊って、こうすれば登る車が出る。地図を見
ながらまるでヒマラヤやアルプスの高峰に登るよ
うな気持ちだった。三浦半島のハイキングコースから
箱根、尾瀬、霧が峰、奥秩父、谷川、北アルプスへ

初めの頃の浅間

九月のある日曜日、友人と二人で浅間に行く事に
し計画を立てた。浅間山へ行く。浅間山へ行く。浅
間山の電車にゆらゆら朝の小諸駅につくと、駅前
は登山者でたいへんにざわわっていた。天気はよく絶

と計画がしだいに実現するのがとても楽しく、それ
がいつぞう山への憧れがぬを植えた。たゞ行きたえす
れば何処でもよく。緑の美しい五月や紅葉の十月は
もちろん、雪の降る寒い冬の日曜日でも楽しかっ
た。あの時のような山での感動は最近少ない。

若い大切な時期を山への情熱につぎこんだことに
悔いはしない。そしてあの頃のあの山での数々の想
い出がなつかしくよみがえってくる。



石山武

好の登山日よりである。バスが峠に向う。車窓の景色
小諸よりバスにゆらゆら車坂峠に向う。車窓の景色
はすばらしく、遠くハハ岳、葦料峠がよくみえる。
バスが峠に近づくにつれて眠くなり、目がさめたら

一九六八の阜坂峠だった。峠から一時間二十分の登りでトミの頭につく。山頂からの展望もすばらしく目の前にハッ岳、南北アルプス、中央アルプス等がとてもよく見え、友人と二人でしばらくみとめていた。近くにいた世姓に年貢をとってもらい、思い出さず、ここから湯の平へ急な下りである。

この湯の平高原は浅間のヤ一爆発の時にできた火口原で、高山植物と展望に恵まれた高原である。

高原より一時間の登りで浅間山の山頂である。山頂に辿りつけばアルプス連山が周囲に展開して、その景観に思わず疲れも忘れてしまった。

山頂でしばらく休憩してから往路を引返し、今夜の宿、火山館しに着く。ここから上を見上げると、トミの頭が見えまことに雄大な眺めである。山の夜は寒く午後八時には寝袋にもぐりこみ、明日の天気を祈る。

五時起床、窓をあけると前日と同じく良い天気である。宿を出る前に、宿のおばさんから浅間がどうのことを聞いた。それは

「この山でとれるがどうに砂糖としようちゅうを

入れ、しばらくおくとしてもうまいぶどう酒がでる。このことである。そこで今日はぶどうを取りながら歩くことにした。ユースは天狗の露地より、石尊山から追分を下ることにする。

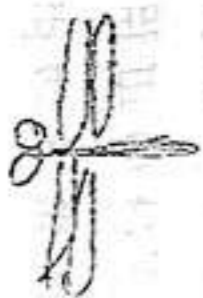
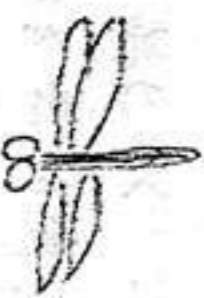
森林の中をしばらく行くと天狗の露地になる。ここは昔、天狗が箱庭のようなものを作ったと云う伝説があり、とてもきれいな所である。

ここから石尊山までの間はぶどうを求めながら歩いた。この浅間ぶどうは粒は小さいが口にふくむと、おどろきの味である。

石尊山につくまで友人と二人で夢中でとりはじめ、時間の過ぎるのを忘れた。

そして山頂に着くころには飯盒一杯にとめていた。

山頂で浅間の噴煙を見ながら、宿のおばさんの作ってくれた大きなオニギリを食べながら、楽しかった山行を思い出して、またくることを約束した。



初めての山

久保田 岩

私の初めての山行は、度十年前の槍ヶ岳単独登山である。もっともそれ以前に相模大山、仏法僧で有名な法来寺山、富士山と登ってはいるが、それは講中登山であり、学校の遠足でありまた町内のレクリエーションであるといつた具合に今の山登りとは根本的に違うものであった。たゞ槍ヶ岳に行く一年前の富士登山によつて、山がどんなに素晴らしいかということ、残念ながら天候には恵まれなかつたが朝六合目から見下ろす雪海と、その向からよきによきと突き出た山々にひどく感動し、山登りの苦しさや登つた喜びを味い、以後山を歩き出した悪い動機となつた。

何故、槍ヶ岳を目指したかと言えば、それはスノーシュー新雪に、燕から槍ヶ岳へのいわゆる表銀座コースがでていたからであつた。そして槍ヶ岳と言えばどこかで聞いたことのあるような山名であり、事実アルプスはあるが丹沢さえも全然、山の名など知らなかつたしアルプス的で冒険心を満たしてくれら

思つたからである。そして富士山の時は町内登山で団体行動のため、すっかり時間をくいと、八合目で所向切以下山ということになり、大変残念な思いをした。これでは一生富士山にも登山なかつたと言わねるのもしやくだから、もう少し険しそうな所、そういふ槍ヶ岳とやらへ一丁登つてやら、と言う氣になつたのである。

一応北アルプスのガイドブックと五万令の一の地図も買つてきたが、地図なんか全くアクセサリで、当時はマップケースに入つてサックの後に挿すのが流行つていたので、たゞまねをしたばかりであつた。

初めて新宿駅に行き切符売場の掲木板を見れば、目的地の有明駅が書いてない。あわてて隅へ行き、サックからガイドブックをよびてみれば、たしかに有明駅と書いてあるので安心して、切符を買つた次で

中房温泉に降りてのチー印象は空気がいいなと言ふことであつた。合戦小屋までは快調に登る。(こ

ここで泰さんという兄弟と一緒にになり、一人で心細か
った私は以後徳沢で別れるまで、いろいろ面倒をみ
てもらった。その後交信してはいないが現在はどうか
しているか、なつかしい。
そこからバテ気味になり、カスもかかって視界が悪
くなる。ふと前に立っている人に「小屋まであとど
の位ですか」と聞くと、「ここです」と言われ、一
瞬カスが吹かぬると十倍ほど上に立派な小屋が建っ
ているのでおどろかされた。期待していた大展望は
カスのため見られず、いささか残念であったがさま
い藪の頂上へ立った時はその白砂と丸い松のクリ
シンのコントラストの美しさとともに燕尾感で一瞬で
あった。

夜中の三時頃に目覚めてなんと外へ出ると、
満天の空は星降る如く輝き「おお、見れば高嶺の谷
を隔てて連なる峰々、そして左の端には夜目にもは
っきりと虚空天を穿く槍ヶ岳、始めてみる山々の名
も全然分らぬままに槍ヶ岳だけはハッキリとみた。
今、私は地にひた伏し、またそこかしこを跳び廻り
小屋で寝ている人人に「槍が見えたぞ」とどなりた
い衝動に駆られる。それは二十文の私をえてえらく

感動させたものである。その数時間後に見た始めて
の御来光もまた美しかったが、始めて槍を見た感動
には遠くおよばなかった。

朝の大天井への稜線歩きは好天にめぐまれ、大変
楽しかった。西岳で昼食のとき、泰さんから「あれ
が穂高ですよ」と前の山を指されたが、ほんか山が
沢山ありすぎてどれだかわからなかった。へ實際穂
高と言えは一つのピークと思っていたから、ああ穂
高がごちゃごちゃと幾つもあるうとは知らなかった
訳である。
ここらからカスが出てきて、未俟乗越から槍への登
りはたゞもう夢中であつた。そしてらひよいと肩の
小屋についてしまった。

明るいはその日も快晴、槍沢では始めての雪渓を
見て大喜びですべったり転んだり、そこらまではよ
かったが、その先の長いことながいこと、かかはず
れが痛く泣きの涙で下ると、槍沢小屋でからぞうり
をみつけ、本ツとする。西尾ともベトリ皮がむけ
見るもむざん。それも道理、アルプスへ登るとい
うので中古靴屋で新調したばかりで足になれていな
いのと、靴下が藁干の二枚しかはいていりなかつたのだ

から。

幸川の流氷に沿ってレリカゆんうんざりした頃徳
沢園につく。私はここでもう一泊の予定なので泰さ
ん兄弟と別れを分る。

翌日は昨晚小屋で合部屋になつた人が二の宮の人
なので一緒に下る。途中で明神池を見、カツペ橋か
ら大正池まで遊び歩きたまもどり、バスで松本へ。
道みち山の話をいろいろ聞く。「笑つてすかしと自
か出「二十才です」と答えるといいい僕よりハッ
き若くて、ここからとんとん登れますぬ」と言われ
る。その時は二十ハ才のその人がえらく年配にみえ

南アルプス

鳳凰三山

(本
部
山
行
年
9
月
5
、
6
日)

中山一重

再度の計画も雨で実行できず、この年になつたに
残りになつていたが、本部山行で4ヶ月ス当来。
残巻後しい九月初旬、仲間三人と参加した。
まだ晴けやらぬ並崎駅でバスを待つ間、観音そば
を冒にあさめる。
バスで穴山橋までくるとトラックが待つていて、柳
座石鉢裏まで運んでくれば、ここで一息、目の前に

だが、現在その姿を載せたいまままだ歩けそうな
気がするし、今後も歩いていきたいと思う。

中央線の車中で「あしがハ、岳ですよ」と言われ
て一つのピークを指したら、山塊の絶頂だと言われ
て恥かしく思ったのもなつかしい。

南アルプスの山山も一つ一つ説明してくれだが、初
めて聞く名ばかりでハイハイと聞くだけであつた。

あしがから十年、山を想えば人またなつかしき思い
出ではある。

見る燕頭の登り区さかなにと食欲は進む。

水を貯え登りにかかる、急登に次ぐ急登、支那の
ペースとちがいがい大分早いペースだ。追いつくのにヤ
っとであたりの景色も目に入らず、フワフワ言いた
がらヤツこのこと燕頭につく。一面の壁がしっ
ていて木の向こうに薬師岳がみえる。紅茶を作り昼
食。一時間ほど休んで出発。

ほごらかな登りである。右手に甲斐駒が見える原生林の中をすゑると、今日の宿風園小屋についた。冷たい水で顔を洗い一休みめあと、地蔵岳に登る。空身とはいえかし場にはマイツタ、高山植物の群落がある。水のないこんなカレにも咲くカ。まゆをせねばこんな所でバテた自分が恥かしい。カレをついて岩塔にとりつき、北岳をはじめ南アルプスの山を眺め、いつの日にかきつと登ってやると臆理にまごむ。崖にたつて自己紹介。思いあもい勝手なことをのべて笑いのうちに終る。

カレを下り小屋に近づくといけいけいカレが凍ってくる。たまらなくなつた腹の虫が泣き出した。センバイ布団と毛布で寒い一夜を明かしたが、前日の天気とはうって変り今も降りだしそうである。観音岳に向う。ジクタクな登りをくり返して山頂につく、二等三角点。踏んでいれはどんなに素晴らしいことか、どうも今年は天候に恵まれていない。私の行く所処平雨がつきまとう。今回こそはと祈つてきたのに、とうとう降ってきた。また不思議なことに雨が降るとがせんフアイトが濡く私なので仕天がわ

るい。これも今までの生活の知恵か、なんて一人言を言っている間に薬師岳。早そうに下りにかかる。砂地を一目散に下つているうち一人がいなくなつたのに気がつき、さがしたが見当らず、ベテランなので置いて行く。へ翌日はちゃんと帰宅していった。南御室小屋で早い昼食、ひえた体に暖い紅茶は骨身にしみる。

ゆるやかな登りとなり辻山をまき、雨の中を急ピッチで歩く。杖立峠を登って夜叉神峠につく。もう一息でバス停に出られる。バテたAさんをいれわりながら全員無事茶屋に到着。マイクロボスで靴の本鉢泉で一巻、湯上りにビールを飲み、体がやわらかくなったので美容体換をしたりの楽しい山行であった。

竜爪山 浅井俊明

東海道線に乗って静岡付近で北方に手近く見える双峯、そのが竜爪山である。二つのコブの高い方が文珠岳（一〇四一）、低い方が薬師岳である。そして車窓から見ると、右手の薬師岳の頂上に木立のあ

この山は静岡のハイカキがよく訪れるが、東京方面からはあまり登りにでかけない。その山は竜爪山に限らず、この付近の山へ例えは真富士山や赤石岳、天子山塊、十枚岳等についても同じことが言えようのである。私は今後静岡の山々にも足を向けてみようと思ひ、まず手頃な竜爪山を選んでわけである。

前々で静岡で一泊して翌日のんびり登った。静岡駅よりバスへ竜爪山線へ平山までゆく。街をはずれると、高山の双峯と竜爪山の双峯が眼の前に見える。平山からしばらく行くと鳥居をくぐり、茶畑の中でじくじくに登つてゆく。振り向けば駿河湾がきらきら光っている。高山との命坂からしばらくで平地へである。ここは「天狗の躰場」と呼ばれる所で、静岡のハイカーがキヤンパをして居る。いまは全く荒れはてた徳積神社を通り抜けて、きつい登りを五十分程がんばると薬師岳につく。展望は非常によろしい。東に富士山へ宝永のコースがよくわかり、甲州からみる富士より突立っている感じがする。その右に簗杉山を思わせる愛鷹山、伊豆天城の景光巻と駿河湾と見える。景色は非常によいのだが、登山の多いにはへいこうする。おこしにしよう

次のこの文珠岳には一算三角嶺がある。南へ下りて麻機山を経て茶畑の向をくぐり抜けて内屋へ下りる。道は迷うところはなく、冬の日をすくすくすにゆり山である。

丹次 天長 小川 竜利

カモニカ行というほどではないが、夜歩きで松洞丸へ向った。

相変わらず大倉尾根の登りはきつい。久し振りの夜歩きなので眠くてやりきいそうとうたて立で夕ウ。二時間程寝ようとして横になったが、寒くて寝むけず、一時間位で我慢出来なくなりまた歩きだした。入るまで静岡へ来た。...

塔の岳をすぎ、竜爪馬場附近で夜が明けてきた。

塔の岳より奥へ入るのは久し振りだ。

丹次山頂では大分天幕が張ってあった。不動の峰をすぎ蛭ヶ岳への登りになる。以前登った時は辛い感じきつい登りだと思つたが案外簡単に頂上についてしまった。

ここから主脈コースと別れて白ヶ岳へ向う。急坂

を一気に下り、左手にかしをを見ながら一登りすると
白ヶ岳につく。縦走路は急に石折しながら下っている。うっかり
戻っすぐ行くと向違える。小さな登起を幾つも越え
神の川乗越、金山谷乗越を過ぎて松洞丸への登りに
なる。

階段状の足場はそのままのこも入を歩いてきた足
にはいささか苦しい。頂上直下に青ヶ岳山荘がある。
頂上からもときどき道を金山谷乗越まで戻り、金山
谷乗越の沢から松洞に当って十数度流氷を渡り返す
と、左岸からユートシン沢が入ってくる。道は左岸に
高くなりユートシン休泊所へと続いていく。

南アルプス

北岳から塩見岳へ

今年もまた夏山シーズンを迎え、我々ほ人があま
り登らず且つ深味のある山として南アルプスの北岳、
南の岳、塩見岳という三〇〇〇峰以上の山を運び、
梅雨あけと同時に三泊四日の予定で出かけ

「わあ、大きいカックルだ」
「うん、三年振りに二尺四寸のキスリンクをま

ユートシンから玄倉のバス停までは二時間位の道程
であるが、まじ日は高いので雨山峠へ向う。約三
分程の登りで峠につく。
ここから岩沢へ下る道は複雑でわかりにくい
ケルンをたよりに下れば向違わぬであろう。下る
途中に地獄ガリの岩壁や清兵衛の崖が見える。

水瀬の沢、滝尻沢等を急送ると、もう宇津茂の部
落だ。バスで松田へ出るのが一番楽だが、せっかく
ここまで来たので中山峠越えの道をたどる。峠の水
場でのどをうるおし、三邊峠をすぎれば松田川
は近い。我々の歩行時間は約十四時間三十分でし
た。

浅井俊明

「うん、暑して調子よく歩けるかどうか不安だよ。し
「大丈夫よ、天気もよさそうだし、他にしよえる
人もいるから」
「年に一度の戸ノ山行をからがんはってみるよ」

かくて数名の男は新宿発20時20分の汽車で甲府

へ向う。最終鋭行は混む可能性が非常に強く、まだ登り始める時刻が遅くなることから、この汽車を選んだわけである。甲府に着くと、予約しておいたマイクバスが已に我々を待っていた。広河原までの2時間は、そろばん道路でほとんど一睡もできないという状態であった。マイクバスが帰って暗闇の中に我々は置き去りにされる。野呂川の瀬の音が耳にひびき、木立の向からはこぼれんばかりの星が垣向射らぬ。今日の晴天はこれで予約されている。

「全暗闇だから方向がよくわからぬ、一旦川を渡って石手の尾根へ取り付くんだらうぬ。」

「あの遅ちやんにきいたら、すぐに丸太橋を渡るから気をつけろとさってたせ。よく落ちるのがいるからって。」

「疲れそうもなかつたら明るくなるまで待てばいいさ。」

案じていた丸太橋もたいたことはなく、また道も指導標が完備さしており判りにくいところはなし。丸太橋を渡ってしばらくすると丸河原小屋の横を通り、いよいよ御池小屋までの樹林帯の中の急な登りにかかる。急登故ぐんぐんと高度をかせぐ。一時向

半も登るとようようと東の空も白みかけて鳳凰三山が明けの空にシルエットに浮かぶ。このあたりから、キスリンクの重さが肩にずっしりとくいこんできて休憩時間も多い多くなりがちである。4時間も登ったころ、はっきりと御池小屋へたどりつく。ここでも始めて北岳を眺めることができる。北岳バットレスが眼前にそびえている感じである。

「さあ、草すべりを登って稜線へはいれば肩の小屋はすぐさ。」

「まだ時間も早いし、今日は全然眠ってはいから昼寝でもしないですか。」

「そうだね。木蔭の涼しい場所で一眠りしよう。振り返って鳳凰三山を眺めて気を慰めつつ、一歩一歩高度をかせぐ。名にし負う草すべりの急登である。かんかん照りの中、登りはじめるとすぐに全身汗だくとなる。草すべりの急登も現在は途中より右手に雑木林の中に入ってゆく。やがて樹林帯をぬけて、岩とハイマツの向をしばらく登れば小太郎尾根へとびだす。」

「きしいね、向うの白山は何？」

「あれは甲斐駒。」

「じゃ、その左手のどろどろした山は？」
「鋸岳だよ。」
「ここから北岳肩の小屋まではベツトレスを正面に
みながらゆるい登りでまさにフロムナにドコロス
である。小屋の前には相当大きい雪渓がまだ残って
いる。夕方も終えて外へ出ると夕陽はまさに仙丈の
後へ沈まんとするところであつた。」

「この天気では今日は停滯かしら。」
「ひどい風だし、視界も全くなりかねいね。氣象通
報によれば、寒冷前線が東北から北陸へ走っており、
山岳地帯では次第に霧が濃くなると言つてゐるから、
今日は晴れる見込みは少ないね。今日は歩く時
向は少ないし、雨も降つてないから出かけようや。」
「天気がよくならなかつたら農鳥小屋へ行つても
いいわね。」

「うん、増水時の大門沢がこゆいけだね。」
山の天気はまことに変わりやすいもので、昨日の
快晴よりみて今日も同じくとの期待は完全に破られ、
霧の中を北岳頂上へと向つた。野呂川方面は意外と
晴れてゐる。時折、甲斐駒、鋸岳が姿をみせるが、

すぐに霧をかかつてしまふ。足元に咲き競うミナノ
キンバイ、オヤマノエンドウ、シヤマシオカマなど
高山植物に慰められて、ゆっくりとしたペースで進
む。北岳から一時間ほどで稜線小屋につく。ここからゆるい岩礫の尾根道をたどり、あきるほど
のピクを登るうちに中白峰はまはれてしまつたらま
く、いよいよあれこそ中白峰と思つてついたところ
は向の岳であつた。が、ドブツクによると、向の岳
の頂上は「E」な頂きでカスにまかぬたときは横
重に行動しないと遭難の恐れがあると書いてあるが、
それほど危ない頂上との感じは受けない。

ここに至つて、運よく霧もはれ、農鳥がまんま
に、荒川、赤石、聖がはるかに、振りかえれば北岳
が、その左手に甲斐駒、鋸岳といった南アルプスの雄
峯が姿を見せはじめた。

農鳥岳へ向う道と別れ、西方へ熊の平へ向う。こ
れからたどる稜線がよくみえる。途中から仙丈の馬
鹿尾根よりくる道と三峰岳で合はしてゐる。向の岳直
下に遭難碑が立っている。

「大正十五年七月十六日人夫一名ヲ伴ヒ白峰縦走ノ
途路、風雨ト寒氣ノ爲メ此地に墮ル。享年三十一才」

意」と記されている牛糞高昌氏の追悼碑である。歌
とうを輝けて、下りをつづける。大井川、野呂川、
三峰川の分水嶺たる三峰岳を通り、熊の平を回指す。
小屋の屋根が林向に光ってみえる。

「すいていてよかったわね。」

「ここはすいてるね。どこからくるにしても二日
はかかるからね。」

「窓から農鳥岳がすぐ前にみえるわ。」

「ちよつと、窓のところを座って農鳥岳を眺めて
くれないか。写真区とるから。」

熊の平は静かで水うまく花さけいと三拍子そろっ
た一級地である。どんよりと雲が空にはりついた天
候の中を涼しいうちに登ってしまおうと早登して塩
見岳へ向う。ここから北荒川岳までは昨日にもまし
て高山植物が百花繚乱の様である。三沢に至る道中
水場は一つ所、北荒川岳の直下にあるのみである。
ちよろちよろ水で水筒を満すには時間がかかるが、
用心のためここで補給してゆく。この水場を少し登
ると、今度は右手に大きなかしを見る。これは昨日
三峰岳よりよくみえたものである。このかしのすぐ

後に塩見岳の岩稜がすばらしい。低くたゞこめた雲
もようやく去り、強い日射となる。

「おい、カモシカがいるぞ。」

「どこにっ。」

「コッほら、あそここの岩の上だよ。」

「ほんたにや。ゆえ、双眼鏡貸して。こっちをじ
っと見てるわ。珍らしい動物がいるなんて思ってい
るんじゃない。」

「かもしかの歓迎を受けて一同気よくして足どり
も軽やかにつとはいえないかな？」と進む。やがて登
投矛の露堂地に着く。ここからの展望もよく遠く富
士山も眺められる。今度こそとねらっている荒川、
赤石、聖の南峰の山々もはるかに見やられる。我々
と同じ晩出発した仲間がいま荒川から赤石へと向っ
ているはずである。

ここからいよいよ塩見岳への急な登りである。北
候岳への登りでひよいと山り返れば、つい今しがた
姿をみせていた雄峯は已に見えなくなり、あたり一
面真白なヴェールで包まれてしまっている。

塩見岳についても依然として霧の中である。岩稜の
塩見登頂の感慨に長くひたる向もなく、早々に出発

二の欄 読むべからず

あなたは題字がわからぬのですか、二の欄は読まないでください。内容はほんにもないからです。なにも書いていないのですから、読んで無駄なのです。不幸にして読み始めた人は、いまずぐやめた方が賢明です。

あなたはまだ読んでいますね。まだ読むことをやめる気はないのですか。念を押すようですが、この欄は本当ににも書いてありません。読んで無駄です。早速おやめなさい。……どうしてそんなに読みだがるのでしょうか。二の欄がことわっているのに、それでも読むとうとなさるのですか。

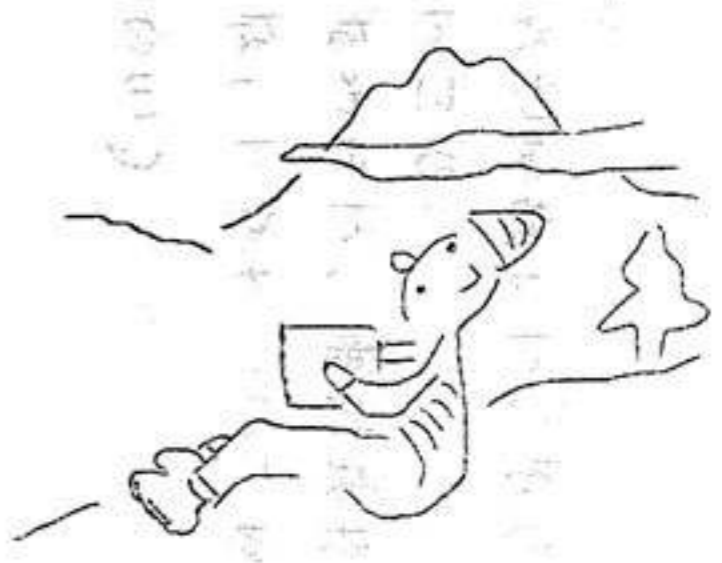
いやあ、あなたは大変見上りな人です。実に立派な人です。おそらくあなたは、支部活動にも熱心な人とお見受けします。あなたの様子が支部に入勢したら、本当に厄いものかもしれません。がゆえ、……



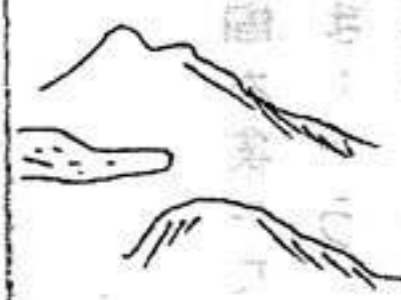
新聞

の

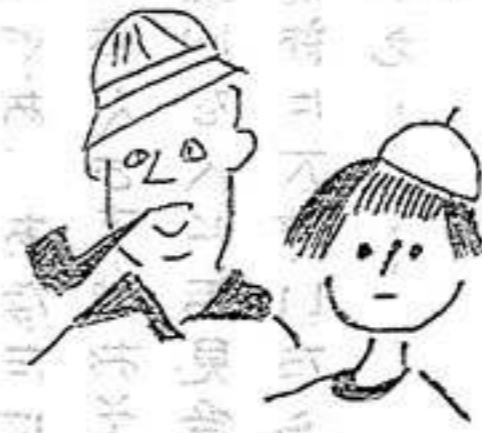
見ると、……



それにしても、再三いうとおりは、あなたのためになることは、ほんに一つ書いていないのです。あ、そうそう、良いことを教えましたよ。支部山行に年10回以上参加した人には記念品がもらえるのですよ。あなたなら大丈夫ですよ。大いにハッスルして下さい。



仲間 の 横顔



より楽しいハイキングをするために愉快な仲間が集ったが、少しでも親和力を強めるために、部員の種類の様なものも御紹介しましょう。尚放言の御許を願います。尚本誌16号にも紹介しましたが、十周年記念と言うことで再掲載し全員の紹介をします。氏名の次はSHC・NOです。

1、浜野 条治 (904)

当支部の長老。県外の山仲間にもその名が知られている。外部の人は皆「先生と呼ぶが我々は「あや」あるいは「お父ちゃん」と呼んでいる。年をとってもまだ若い者には負けられないと奮闘している。お酒が好きで飲むとかえって膝子よく歩けるとか。

2、加藤 喜代子 (1009)

新ハイでも古顔の人で早真は一流とか。山も昔はよく歩いたが、最近では体が悪くさめたため遠ざかっているとのこと。あまり支部に顔を出してもらえず古い人以外には馴染がうすくなりました。

3、小川 竜利 (1949)

支部唯一のキヤリアの持主で、「黒ちゃん」と称し以前は顔が白くなる暇がなかったほど山行でいそがしく、津山行の丹沢シリーズでワラジのはきかたを教えるのが楽しみであったとか。今後も後進の指導をよろしく。

4、影山 元芳 (2093)

支部設立以来つねに先頭になって努力している山男。支部に対する熱意は相当なもので、最近では本によく投稿し横浜支部をPRしている。大きなキスリンクを背いで8ミリを撮っているのを見ると、その体力が美しい。

5、斎藤 清 (2965) 小川先輩に引張られ支部山行で相当実力をつけ

頃、一寸した怪我で山から遠ざかっていたが、最近またボツボツ歩きだしたとか。まだまだ老ける年でもないので支部山行で後進の指導をよろしく。

6、中山 一重 (4090) 女性NO1。カツチリとした体躯で堂々と歩く姿

は男性顔負け。彼世のフアイトは正しいもので、他の人も見習ってほしいものです。

7、久保 田 国 治 (4473) 支部二番目のカッフルでお互に理解がありよく一緒に出かけること。エトモラスな話でよく人を笑わす。人当りもよく山行係になると大勢の人が参加する。この人が支部の代表になってくれたらと思

思います。

奥さんは声が大きく、なかなか話のわかる人で、必平の相談にものってくれます。

8、高山 美恵子 (4664) 意外な山を歩く人で、山に行くときよくバテルが

れでいて山によく行く。この気持判りますか。家がお世間べいやさんなので、山には必ず持ってきてくれるので乗じみだ。

9、中里 一久 (5703) 坊やと呼ばれ支部年少者。なかなかの好男子で

の子にもてるのか。山は遊びとか言っても最近久保田先輩に引張られて歩いている。これからは大いにハズスルして支部の協力者になってほしい。

10、熊谷 幹夫 (5704) 八幡平は俺の庭みたいなものだと称する熊さん。

ちよつと東北弁のなまりがあり、とほけた面もあるが極めて人が良い。熊退治の歌がとく。なかなかの理論家なので指導者には最適。今後と

11. 吉田 信子 (6143)

最近×キ×キ腕いや足が痛んで尻にハリキツテける女性。歌は上手らしいがその美声はあまり聞かれない。今後は支那山行で大いに歌を教えて下さい。

12. 奥野 昌 (4780)

コッコツと地味に歩くためかあまり目立たない。しかし最近は大さけ山が主体とか。大目に経験を積んで今後の支那発展に役立てて下さい。

13. 鈴木 不国 (4765)

山に對する知識は豊富で、山行係の時に参加するとよい勉強になる。また最近は大さけ山をピクハントしている。将来は支那の先頭に立ってもらいたい人の一人です。

14. 相野 谷 喜山世 (5927)

山に對するフアイトの旺盛な女性の若き不器用張りのきく芯のしっかりした人で今後の活躍が期待される。

15. 石山 武 (4486)

浅向同様の通で、浅向アドウ酒を作るのが上手とか。また弁士ムや歌などもよく知っているので、山行・集会には欠かせない人で、これから支那の先頭に立ってもらいたい一人である。

16. 石田 康昭 (5971)

穂高に登つて山の良さを知り、山にあこがれるようになったとか。あまり目立ちはないが、コッコツと山に登るタイフを将来の有望株である。

17. 浅井 俊明 (6058)

静かな山を、そして歩くものんびりと山の場につきかりながら山行を好む。新ハイ向きタイフの人である。これから支那の先頭に立ってもらいたい一人である。

18. 石井 春男 (5743)

非常に明るく活潑で、山行を面白くするには欠かせない人である。しかも本筋ではあるがなかなかタ

フなところがある。今後支部のためによりしく。

19. 町田 麻子 (60/5)

非単におしとやかな女性で、山に登るにはもったいないほどだが、世の中には世語好きなる人もいるから、そう言う人をたよりにして大いに山へ行っして下さい。

20. 佐次 和子

佐次 幸郎 (60/4)

(姉) 家庭的なおとなしい女性。山への情熱はあるのだから、たまがなにか、しかし誘われれば行くそうなので大いに口をかけてやって下さい。

(弟) 支部最年少の彼は未来のスターである。目下勉学中で山行もまだ少いが、これから期待したい。

21. 池田 芙美枝 (59/84)

池田 吾郎

(姉) おとなしい女性だが、山ばかり歩いているので大変憎いです。写真の腕もよいのか、(弟) お寿しやさんに勤めているのであまり時間がない

なく支部に顔を出してもらえないが、これから期待したい。集会でサビのきいたお話をどうぞ!

22. 渡辺 嗣代 (54/93)

あまり音を上げないフアイトのある女性。今後大いに歩くとのこと、支部女性の先頭に立ってほしい。

23. 柳 瀬 善利 (55/?)

大変物静かな男性で、忘れられた頃支部に顔を出し、またまた老ける年ではないので大いに参加して顔を出しなさい。

24. 田中 絹代 (61/42)

女優と同じ名前なのですぐおぼえられます。山に対するフアイトもあるが、非常に家庭的な人で将来は良い奥さんになるだろう。また山で服を脱いだら彼世にどうぞ! 新品同様に直してくれるだろう。

25、鷹地千津子 (6/44)

山らしい山にはほとんど行ったことがないとか。おとなしい女性。後次郎次が初めてで大分きつかったとか。これにこりず今後も大いに頑張って下さい。

26、神谷和雄 (5849)

静かたそとて不遇な山歩きを好む新ハイ向きのタイプ。かつて学生時代は大いに歩いたとか。若い人の指導をよろしく。

27、加藤康子 ()

一見して山に登るために生れてきたように思われるが、実は非常に繊細でやさしい心の持ち主である。これからの支部女性の本拠。

28、今川勝子 ()

高原的雰囲気好み、山への情熱はあるのだが、誘われれば山に行くようなので、今後は大いに誘ってやって下さい。

歴代委員名誌

過去10年間に支部委員として勤めて下さった方々の御名前をお知らせしておきましょう

△32年✓平本和夫、影山元芳、石川和石、金子忠好

△33年✓影山元芳、山崎円夫、小川寛利、鈴木静子

△34年✓中山博、影山元芳、小川寛利、小塚喜子

△35年✓中山博、影山元芳、小川寛利、八田幹夫

△36年✓八田幹夫、小川寛利、酒井国栄、中山一重

△37年✓小川寛利、落合正次、酒井国栄、中山一重

△38年✓小川寛利、落合正次、酒井国栄、中山一重

△39年✓小川寛利、落合正次、有線清、浅井俊昭

△40年✓影山元芳、熊谷幹夫、奥野昌、鈴木不國之

△41年✓影山元芳、熊谷幹夫、鈴木不國之、中山一重

会報受贈御礼

次の各支部から、会報、ニュース紙、通信をお贈りしていただきありがとうございました。
 総共一層努力して楽しい支部にして行きたいと思っておりますので、今後共よろしくお願い致します。

井の頭グループ	会報	10、11、12月号
千代田支部	支部報	35、36、37号
相模原支部	支部通信	10、11月号
太田支部	支部通信	10、11月号
埼玉支部	さいたま7号	

このお礼を申し上げます。
 今後共、各支部の発展と会報の充実を期してまいります。

協会の皆様へ



あとがき

大分発行が遅くおいてしまい投稿された方に申し訳なく思います。

11月から、歌集、部報とかりゆりの連続で読んでこまい。おかげで毎日深夜まででやっとなら上った次才。

来年の合同キヤンスは今から心掛けて10周年集中より多くの人が参加しませう。

10周年記念号、今までの歩みを記録しました。これからも支那のために大いに協力しあって行きたいと思えます。

支那支那支那、支那支那支那、支那支那支那

支那支那支那

“しだ” 才17号

発行 昭和41年12月13日

新ハイキングクラス

横浜支部

横浜市中区初音町一十九

(影山方)

編集者、影山元芳